もうひとつの世界

――大江健三郎の「空の怪物アグィー」論――

宋　仁善

一、はじめに

一九六三年、大江健三郎に障害を持った長男が生まれた。この頭部に障害を持って生まれた子供は、以後、大江健三郎の作品の中で繰り返し登場する。「空の怪物アグィー」は、その最初の作品である。

この小説を独立した一つの作品として分析を試みた先行研究はまだない。平野謙は、かつてこの作品を、『個人的な体験』と全く同じシチュエーションが採用されてはいるが、その結末と全く逆の構図を提示していると指摘している。そしてこの作品は、『個人的な体験』とあわせ読むべき重さを持った作品と評している。[1] 渡辺広士は、赤ん坊を現実世界の恐怖と見なし、この「空の怪物アグィー」では、恐怖からの逃亡欲求がエピソード化されており、こうした主題はのちに『個人的な体験』で一つの結論を与えられる、と分析している。[2] このように、この作品を扱った従来の先行論は、『個人的な体験』との関わりの視点からこの作品をとらえ、障害児誕生をめぐる倫理的な問題の次元にとどまる傾向にある。それは、二つの作品とも〈障害を持った子供の出生をめぐる父親の悩みとその選択〉を描いているからであろう。

しかし、この作品は、作者の自伝的要素、また『個人的な体験』との関連をあまりにも強調して読むとき、作品特有のおもしろさを取り逃す恐れがあると考えられる。例えば、「アグィー」という存在、また「アグィー」が住んでいる〈空の世界〉は、『個人的な体験』にはない虚構の世界であり、〈障害児の死〉という要素をはずして読んでもそれなりの意味を持った、この作品特有の構成要素だといえる。また、「アグィー」の世界の真偽が登場人物で作曲家Dの狂気の真偽と

関わっている点、つまり「ぼく」にとって「アグィー」の世界は、常にDを通してしか感じとることができず、読者は語り手の「ぼく」を通してしかその世界を感じとることができない、という間接的な虚構のシステムも、『個人的な体験』にはない仕掛けである。実際この作品は、評論家たちの中でも、非常に完成度の高い、独立した短編であると評価されている。[3]

この作品を『個人的な体験』から切り離し、独立な主題を持つ作品と読むとき、重要になるのは、「もう一つの世界」（一四九頁）[4]に対する解釈だと考えられる。Dによって「もうひとつの世界」と呼ばれる世界は、普通の人間の眼には見ることのできない「百メートルの高みの空」（一四九頁）の世界である。その世界は、異常・狂気の世界ともいえるが、また見方を変えれば、霊魂の世界ともいえる異世界である。

Dが提示する異世界を読者に伝える役割は、「ぼく」に担わされている。この作品で「ぼく」は、ストーリー展開上欠かせない登場人物でありながら、〈語り手〉の役割も兼ねている。作品前半部で、確かにその世界を肯定できなかった「ぼく」は、次第に変化を見せ、小説の結末部分では、Dが提示する「もうひとつの世界」、つまり「アグィー」の存在を肯定するようになる。

普通の人間の眼で見て、狂気の世界に近い「もうひとつの世界」は、はたして肯定できるものか、それともそうではないかという問題をめぐり、この作品は両義的である。というのは、この作品には、異世界を否定する姿勢から、それを肯定する姿勢へと変化を見せる「ぼく」の表面的な語り――体験談――と同時に、それとは反対の方向性、つまり、肯定から否定への変化を示す語りがあって、常に両義性を維持しようとする仕組みが感じとれるからである。いいかえれば、テクストの中には、「もうひとつの世界」を肯定するようになる「ぼく」とは距離を置く仕組みが存在し、その存在は〈もうひとつの世界〉に対して絶えず中立あるいは両義的な態度を堅持しようとする。渡辺広士が、「現実逃避の幻影の世界に対する大江健三郎の姿勢は両義的なものである」[5]と評したのも、おそらくテクストのこうした両義的な態度と関わっていると考えられる。

それでは、「もうひとつの世界」の真偽をめぐるこの小説の両義的な態度は、具体的にテクストの中で如何に巧みに仕組まれて表されているのか。本稿は、テクストの中で「ぼく」が担う二つの役割――登場人物としての「ぼく」と語り手としての「ぼく」――の距離を考えることから、この問題の解明を試みる。以下、まず、テクストにおける表面的な対立

構造である「ぼく」と「D」の対立構造が、如何に展開され如何に崩れていくのかを検討する。その後、テクストの裏側の対立構造と見られる、登場人物としての「ぼく」と語り手としての「ぼく」との距離が、如何なる装置として働きかけているのか考察する。そして最後に、「もうひとつの世界」の拡張された意味を探ることにより、新たな観点から、このテクストの読解を試みる。

二、「ぼく」vs.「D」

異常性の問題は、大江文学を論じる際、欠かせない要素の一つである。大江の作品には頻繁に異常な人物が登場しており、それはときには狂気へまで発展していく。この作品に描かれている「もうひとつの世界」も、いわゆる〈普通〉の眼から見れば異常性の世界、狂気の世界である。

この作品で、表面的な対立構造を見せているのは、正常の世界と異常の世界である。異常の世界に属している人物は、作曲家Dであり、それ以外の登場人物は、一応正常の世界に属している。特に「ぼく」は、正常の世界に属する人物を代表する存在として登場しており、したがって、作品における正常と異常の対立構造は、登場人物「ぼく」と「D」の対立構造として置換できる。

まず、「もうひとつの世界」内の人物であるDについて考えてみよう。Dは、頭部に瘤を持って生まれた自分の赤ん坊に、ミルクを与える代わりに砂糖水だけをやり、赤ん坊を死なせてしまった人物である。その後、Dは「積極的に生きることを拒否」し、幻影の世界へ逃避するようになる。彼の見る幻影とは、アグイー、すなわち彼の死なせた赤ん坊の霊魂のような存在である。なぜアグイーというのかといえば、「その赤んぼうは生まれてから死ぬまでに、いちどだけアグイーといったからなの」(一三九頁)である。アグイーが見える「もうひとつの世界」は、Dによって次のように描写されている。

> また、きみはウィリアム・ブレイクの絵を見たことがあるかね？とくに《悪魔の饗応を拒絶したもうキリスト》という絵だ。また《歌い和する暁の星》という絵だ。どちらにも、地上の人間とおなじ現実感をもった、空中の人間が描かれている。それもまた、ぼくの見るもうひとつの世界の一面を暗示していると感じるんだ。ダリの絵にもぼくの

見るきわめて近いものがあったなあ。空を、地上から、ほぼ百米のあたりをアイヴォリイ・ホワイトの輝きをもった半透明の様ざまの存在が、浮遊しているんだから。ぼくの見る世界というのはそれなんだよ。（一四九頁　傍線筆者）

その「もうひとつの世界」が、ほかの人の目には見えずDの目だけに見えるという点で、Dは確かに普通の人と区別される。

Dが異常世界の内部のメカニズムを見せてくれる人物であるのに対し、小説前半部の「ぼく」は、正常な世界を代表する人物として描かれている。Dの生きるもう一つの世界は、決して正常な世界ではなく、異常世界、信じられない世界、非現実世界、幻視の世界であることを語る、〈普通の眼〉を代表する存在である。この点は、「ぼく」とDとの初対面の日、次のような「ぼく」の語りを通しても分かる。

ぼくはかれのまえに立ち、かれの背後の開かれた窓から、それが入ってきてかれの脇に降りたつことを、しだいに緊張をつのらせながら注意していた。ぼくはもちろん、その怪物の存在を信じたわけではない。ただ、アルバイトの賃金をはらってもらうだけのことはするためにぼくの雇傭主がその妄想にとらえられる瞬間を見おとすまいと心がけていたのだった。（一三四頁）

しかし、「もうひとつの世界」をめぐる「ぼく」とDの対立構造は、小説の前半部と後半部において差異を見せる。初めは「ぼく」も他の登場人物と同じく、Dが見ている〈空〉の世界を「妄想」としか見なさない。また、Dに訪れるアグイーの存在も、「ぼく」にとっては想像上の「怪物」にすぎない。しかし、時間が経つにつれて、「ぼく」は「このアルバイトを愛している自分を見出し」、Dと離れているときにも「Dのことばかり考えている」自分に気づくようになる。それは「もうひとつの世界」への関心を次第に深めていく「ぼく」の心理的変化を表す部分である。次の引用は、「ぼく」が自分とDの世界との距離を強調した部分であるが、事実上、それは、「ぼく」がどんなにDの世界に接近しているのかを証すものである。

ミイラとりがミイラになるというか、気違いの見張番が気違いになるという、ちょっぴり深刻でニューロティクなどたばた劇の筋書きどおりに、自分の常識の錘を見うしなうことはすまいと誓っていたのだし、（中略）すなわちぼくは依然として、Dとその空想上の怪物とから、冷静な距離をおいていたわけだ。（一四七頁）

「ぼく」は、もはや自分への誓いを必要とするくらいにDの世界へ近づき、そのために次の段階――片目を犠牲にした代わりに「もうひとつの世界」を見ることが可能な段階――にまで進んでいく。

作品の中で、アグイーに対する「ぼく」の呼び方が徐々に変化していく点も、「ぼく」の心的変化を裏付けている。それは、初めての外出時と最後の外出時の、「ぼく」の言い方を比較すればすぐに分かる。

①「それがあなたの脇に降りてきていると見わけるにはどうすればいいんでしょう？」（一三三頁）

②Dがなお雪もよいの穢らしく黒い空を見あげた。そしてアグイーがかれの脇に降りてきた。（一五二頁）

②は、Dとの最後の外出時のものである。「ぼく」によって、初めは「それ」と呼ばれていた存在が、ここではなんらの修飾もなしに、ただ「アグイー」という名前で呼ばれている。もちろん、ここで「ぼく」が、実際に、アグイーの幻影を見たわけではない。しかし、それにもかかわらず、「ぼく」は、自分の想像したものをまるで自分の目で見たように、「アグイーが降りてきた」と叙述している。そして、小説の前半部で、「ぼく」が、アグイーを称するときに常に付け加えていた「怪物」とか「お化け」などの修飾語が、後半部ではなくなっている。これらは、「ぼく」の変化を隠然たるうちに窺わせる部分である。

以上のように、「もうひとつの世界」をめぐる外側と内側の対立構造は、時間が経つにつれて、外側を代表する人物であった「ぼく」の変化を通して、一見崩れたかのように見える。それは、正常性の世界が、異常性の世界に説得されたような感じさえ漂わせる。しかし、それにもかかわらず、「もうひとつの世界」に対するテクストの両義的な態度は、なお維持されている。それはなぜだろうか。もしかしたら、それは表面上の対立構造が崩れただけであり、実はその裏側に、もう一つの対立構造が潜在していて、この裏側の構造が「もうひとつの世界」をめぐる両義的な態度を堅持させているか

らではないか。以下の節では、その裏側の対立構造について考察を進めていくこととする。

三、登場人物「ぼく」vs.語り手「ぼく」

ここでは裏側の対立構造が、登場人物としての「ぼく」と語り手としての「ぼく」との距離から由来していることを確認していきたい。この小説の〈語り〉には、「もうひとつの世界」の外側から内側へ移動していく「ぼく」という仕組みとは方向を異にする、別の仕組みが感じとれる。それは異常性の世界への心理変化を見せる〈登場人物「ぼく」〉とは距離を置いた、〈語り手「ぼく」〉の存在である。それは例えば、Dの死を事故として語る〈登場人物「ぼく」〉と、それが巧みに計画された自殺であるかも知れないと暗示する〈語り〉のズレとして現れる。さらに、登場人物を演じる「ぼく」と、語り手としての「ぼく」の視線の差異は、「もうひとつの世界」をめぐる〈外側〉と〈内側〉の反転可能性をも暗示している。その点に関しては、後に述べることになるが、こうした両者の方向のズレこそ、「もうひとつの世界」に対するテクストの二重的な態度を維持する重要な仕掛けの役割を担っているのである。

それでは、〈登場人物「ぼく」〉と〈語り手「ぼく」〉とのズレを窺わせる、Dの死をめぐる叙述を考えてみよう。まず次の引用は、「ぼく」の眼にDの交通事故がどう映っていたのかを示す部分である。

> Dとその幻影が車道に降りたとたんに、信号が変わった。Dは立ちどまった。年末の荷物を積んだ象のように嵩高いトラックの群が疾走した。その時だ、不意にDが叫び声をあげ、なにものかを救助するように両手を前にさしだしてトラックのあいだに跳びだし、一瞬、はじきとばされた。（一五二頁）

引用によれば、Dは、まるでアグイーを危険から救うために車道へ飛び込んだように描かれていて、「ぼく」[6]の眼には自殺としては見られていない。しかし、作品の中には、Dの死をあらかじめ計画された自殺としても受け入れられる伏線が、実は所々に設置されており、その伏線を設置した存在は、〈語り〉を紡いでいく語り手である。例えば、Dは、その事故以前、自分の作曲した楽譜の草稿をすべて焼却してしまう。そのために「ぼく」は、楽譜の草稿を取り出すのに必要

な鍵を受け取るため、Dの離婚した妻のもとへと赴く。ところが、ここで「ぼく」は次のような疑いを抱く。

Dが、その離婚した妻のいうとおりの状態にあるなら、かれは、この鍵でひらいた箱から、ひとつつみのシアン化合物をとりだし自殺してしまうということもありえるではないか？

（一四〇頁）

「ぼく」はこの後で、楽譜の焼却場面を目撃し、自分が誤解したことを悟る。しかし、さらにまた、焼却作業を自殺する前の身辺の整理と見なすなら、つまりDの死を、事故死を偽装した自殺として見なすなら、やはりあの鍵は、Dの自殺の伏線としてこ作品の中で機能することになる。

Dが、自分の死を準備するような気配を見せる箇所が、もう一つある。彼は自分の作品が演奏されたすべての演奏会場を訪ねたがったり、卒業した学校へもすべて出かけたりする。それだけでなく、酒場や映画館、屋内プールなど、かつて彼が遊びに行った場所にまで訪れたり、かつての情人との間を整理したりするなど、自殺の準備として受け取れる行動を見せている。もちろん、この段階で「ぼく」は、この一連の作業が自殺の準備だとは全く思っていない。しかし、この作品の語り手である「ぼく」は、Dの異常性自体がニセであることを予め暗示しており、このような様々な伏線こそ、語り手がこの作品の中に仕掛けておいた装置である。そうした語り手の態度は、Dの異常性を疑っていない〈登場人物としての「ぼく」〉の態度とは違ったものである。その〈語る「ぼく」〉と〈語られる「ぼく」〉の両者の距離が、「もうひとつの世界」の真偽をめぐるこのテクストの二重的態度を支えるのに重要な働きをしているのである。

もしDの死が彼自身によって計画された自殺であったら、Dはもうこれ以上、異常性の世界に属する人物だとはいえなくなる。Dが「ぼく」に見せたアグィーとの出会いの場面も、彼の演出によるものとなるからである。いってみれば、作品の中でアグィーがDの前に出現するのは、他人の耳目がDに届かない場所、いいかえれば「ぼく」だけがDの異常な様子に気づくことの可能な状況に限られている。それは、彼らが新宿の群衆の中にいるにもかかわらず、他の人々の視線がクルクル回転している老人に集中していたときであり、また、遊園地でDが空中ワゴンに乗っていたときである。あるいはまた、二人が自転車で外出した場面においても、アグィーは、「ぼく」の視線だけがDに向かっているときに出現している。こういう状況の設定も、やはり語り手が仕掛けておいた伏線であろう。

Dの異常性を疑わしく感じさせる伏線は、すでに作品の前半部にもある。Dは「ぼく」との初対面で、「だって気違いに、正常人を試験できますか？」（一三〇頁）と訊いている。Dが自らを「気違い」と名のっているというのは、実はDがその気違い世界には入っていない人物であることの証拠として読める。Dの父親も、看護婦も、Dを「気ジルシ」と見なしているのに、語り手はこうした対話の挿入を通して、そうではない可能性も喚起し続ける位置に立っているのである。

〈Dは果たして狂人なのかそうでないか〉という問いは、結局、Dが事故死したのかそれとも自殺したのかという、小説の後半部の問いにつながることになる。例の交通事故の場合も、Dはいったん立ち止まった後、あたかも「嵩高いトラックの群が疾走」するのを見てから車へ跳び出したようにも見える。それが「ぼく」の眼には、「なにものかを救助するように両手を前にさしだし」たように見えたかも知れない。しかし、事故直後、病室にあおむけになったDに向かって呼びかける「ぼく」の疑問と、それに続くDの表情は、彼の事故をさらに疑わしくする部分である。ここで〈登場人物「ぼく」〉は、これまでの様々な事件がDの自殺の前触れであったかも知れないという事実にようやく気づき、病室のDに向かって叫んでいる。

「あなたは自殺するためにだけぼくを雇ったんですか？アグイーなどあれはカムフラージュだったんじゃありませんか？」そしてぼくは涙に喉をつまらせながら自分にも意外なことを叫んでしまったのだ、「ぼくはアグイーを信じてしまうところだったんです！」そのときDの黒く小さくなった顔に人を嘲弄するような、また好意にみちた悪戯をするときのような微笑が浮かびあがるのが涙で潤みなにも見えなくなるぼくの眼にうつった。（一五四頁）

Dが事前に緻密な計画を立てて自殺したならば、「空」の世界は捏造したものになり、Dの異常性も偽装されたものになる。反面、その世界を否定していた「ぼく」は、作品の結末部分で「空のアグイー」を肯定するようになり、結局「もう一つの世界」をめぐる肯定と否定は反転することになる。「もう一つの世界」に対する語り手の両義的な態度は、その反転可能性に対しても続けて喚起させる位置に立っているのである。そもそも「空」という文字には、〈ソラ（天）〉の意味以外に〈空いている（無）〉の意味もあるという点も、「空の怪物アグイー」に対するこの作品の両義的な態度を暗示しているかのように見える。

以上で考察したように、作品の表面的な対立構造――〈アグイーはいない〉という側の「ぼく」と〈アグイーはいる〉という側の「D」の対立構造――は、「アグイー」を肯定するようになる「ぼく」の変化によって表面的には小説の終わりまで持続できなくなる。さらに結末部分では、〈アグイーはいない〉という側の「D」と〈アグイーはいる〉という側の「ぼく」といった、対立構造の反転を見せる。このように、語り手としての「ぼく」は作品の所々に、アグイーの否定から肯定へ変化していく〈登場人物「ぼく」〉とは違う方向性の仕掛けを設置し、結果的に「もうひとつの世界」をめぐるこの作品の両義的な態度を堅持するのである。その結果、アグイーの世界に対する真偽判定は、ひたすら読者の判断と選択に任せられることになる。

四、拡張する「もうひとつの世界」

このテクストが提示する「もうひとつの世界」は何を含意しているのか。この小説の構造は入れ子型になっているが、ここでは「もうひとつの世界」の意味を、入れ子構造の中身に当たる部分――「ぼく」のアルバイトの回想記――と、入れ子構造の両端、つまりプロローグとエピローグの部分に分けて考察してみたい。というのは、「もうひとつの世界」の意味が入れ子構造の両端で、より幅広く拡張されていると考えられるからである。それがどのように拡張されているのか理解するために、まず回想記の部分での「もうひとつの世界」の意味を整理してみよう。

この作品で「もうひとつの世界」は、アグイーの世界である。それは見方によっては異常の世界として受けとることも可能であり、宗教の世界として受けとることも可能である。ここで、見方というのは、死んだ赤ん坊の霊魂のようなアグイーの存在を信じるか否かに関わっている。霊魂の存在を信じない人に、「もうひとつの世界」は、あり得ない狂人の世界にすぎない。しかし、霊魂を信じる人におけるその世界は、宗教的にも解釈できる。この作品の宗教的な色彩は、すでにブレイクへの言及からも示されている。二節で引用したとおり、Dはブレイクの絵、《悪魔の饗応を拒絶したもうキリスト》に関して直接言及している。その絵には「地上の人間とおなじ現実感をもった、空中の人間が描かれている」（一四九頁）。ブレイクは『ヨブ記』『神曲』の挿絵も残し、彼自身、神と天使の幻視を見たといった逸話が伝えられている人物である。アグイーがDの亡くした赤ん坊の霊魂のような存在とされている点、そのアグイーが〈地上〉とは違う〈空〉

の世界に住んでいる点、そして「死後の世界」についての言及があるという点等々、もともとこの小説の構想そのものが宗教的モチーフを援用している。

その中で特に宗教的色彩が濃い場面がある。それは、「ぼく」がDと自転車で外出をし、一時的な心理変化を経験する場面である。「ぼく」はそれを「自分の心理に、奇妙なことがおこった」と表現している。ここで、「奇妙なこと」とは、〈十頭以上のドーベルマンの出現→「ぼく」の涙→「ぼく」の変化〉という一連の事件を指す。それは、宗教的体験と極めて類似したものとして描かれている。

すなわちぼくは依然として、Dとその空想上の怪物から、冷静な距離をおいていたわけだ。それでいてしかも、このぼく自身の心理に、奇妙なことがおこったのである。

それはこういう風に始まった。（中略）犬の群が近づき、Dはかれのアグイーが、そのもっとも恐れている犬の群に襲撃されると感じるだろう。赤んぼうが犬の群に怯えて泣き叫ぶ声を、かれは聞くだろう。そしてかれはやむなく犬どもにむかってたちむかうにちがいない、かれの赤んぼうを守るために。そしてかれは十頭をこえる獰猛なドーベルマンにたちまちずたずたに咬み裂かれてしまうだろう。（中略）そしてぼくはなにひとつ策を講じることができず、（中略）眼をつむってしまった。しかも獣くさい匂いが犬どもの足音と吠え声とともにぼくを搏ったとき、ぼくは、硬く閉じた瞼のあいだから茫然と涙を流しはじめたのである。そしてぼくは恐怖心の波にはこびさられるままに、自己放棄した……

ぼくの肩に、信ずべからざる優しさの、あらゆる優しさの真の核心の優しさの掌が置かれた。ぼくはアグイーに触れられたように感じた。しかしその掌が、（中略）ぼくの雇傭主の掌であることをぼくは知っていた。それでも、ぼくの閉じた眼はおびただしい涙をこぼしつづけ、ぼくはそのまま、しばらくのあいだ、肩をふるわせてすすり泣いていた。（中略）涙を流したあと、ぼくは衒気と反発心と、疑い深い片意地な心とを摩滅させてしまっていた。

（一四八―一四九頁）

「しかし浮遊しているそれらの存在を見る眼、降りてくるかれらを感じとる耳、それはわれわれがそれ相応の犠牲をはらって獲得しなければならないものだ。それでも突然、なんの犠牲も努力もなく、その能力がさずかる瞬間がある

んだ、今さっきのきみの場合が、おそらくそうだったんだと思うよ」　（一四九―一五〇頁）

ここで「ぼく」の涙が〈変化〉のための贖いの涙のように描かれており、Dが「無償の犠牲」について語っている点は、宗教的な体験と似ている。「空」の世界（アグィーの世界）に対して「ぼく」が態度変化を起こすためには、何らかのイニシエーション的な儀式が必要であり、その擬似的な贖いがあったからこそ「ぼく」の、「空」の世界に対する心理的変化が可能であったはずである。山折哲雄は、「涙は日常的な対象世界を瞬時のうちにデフォルメし、そのような世界の暗転を通して身体のカタルシスと精神の再生を獲得しようとするための象徴的な流出物である」と述べ、涙を宗教体験の重要な要素として見なしている。[7] もちろんこのような体験の後、「ぼく」はすぐに感情の平衡を取り戻し、「プラグマティク」でなかった直前の自分をみずから非難する。したがって、「ぼく」の贖いの涙は擬似的なものでしかありえないのであろう。この事件以後、異常性に対する「ぼく」の警戒心はさらに強まり、「畏怖」の段階へまで進んでいくが、それもやはり彼の揺れる心理変化を反証するものにすぎない。

「ぼく」はDのアルバイトから十年が経った時点で、片目の喪失に伴ってやがてアグィーを見ることができる。それは、頑強にアグィーの世界を警戒してやまなかった「ぼく」が、十年後にその世界を肯定するようになったということである。そして、十年が経った現在の時点で書かれたプロローグとエピローグは、「もうひとつの世界」が、異常性の世界・霊魂の世界だけでなく、より拡張した多義的な世界であることを暗示するのである。

この小説にプロローグとエピローグの形式が必要とされたのは、まずは「ぼく」がもう一つの世界を肯定するようになったことを語るためであり、その肯定に至るまでの十年という時間の経過が必要であったことを説明するためでもある。十年前の「ぼく」には見えなかった世界が、十年が経った後、すなわち「ぼく」が十年前の彼の雇用主と同じ年齢になってから初めて見ることが可能になったのである。次の引用は、その十年が「欠落」と関係があることを示している。

その瞬間、ぼくのすぐ背後から、カンガルーほどの大きさの懐かしいひとつの存在が、まだ冬の生硬さをのこす涙ぐましいブルーの空にむかってとびたつのを感じ、ぼくは思いがけなく、さようならアグィーと心のなかでいったのである。（中略）この十年間に《時間》がぼくの空の高みを浮遊するアイヴォリイ・ホワイトのものでいっぱいにした

ことをも知った。　（一五四―一五五頁）

引用によれば、十年は「ぼく」にとって身のまわりにある数々のものを喪うために必要な時間だったことが分かる。かつて「空虚な倉庫」（一五〇頁）にすぎなかった「ぼく」の「空」が、「見喪った」様々なもので「いっぱい」になるために、この十年が必要だったわけである。この「空」の世界が「ぼく」に訪れるのは、「ぼく」がかつてDのいっていた「欠落」を身につけた後であり、つまり「もうひとつの世界」が見えるようになるのは、「ぼく」が人生の様々な局面の中で、「欠落」という辛さを経験した後である。

この作品の主題に関して先行研究は、赤ん坊を死なせた自らの狂気に対するDの自己処断の作品[8]、あるいは非現世的な時間への逃避[9]など、その大部分が作家大江健三郎の障害を持った長男の誕生と関連づけて論じられたものである。特に黒古一夫は、この作品を「大江は異常児を殺した（であろう）自分を狂気におちいった人間であったと判断し、そのことからその狂者である主人公が自分が殺した嬰児に逆襲され自殺にまで追い込まれてしまう過程」を描いたものと説明している[10]。しかしこのテクストの提示する「もう一つの世界」は、単に〈正気／狂気〉〈現実／幻影〉〈肉身／霊魂〉の次元だけに限られるものではない。プロローグとエピローグはその拡張された「もうひとつの世界」の意味をのぞかせてくれる。このことをよく表している部分がプロローグにある次の箇所である。

ぼくは自分の部屋に独りでいるとき、海賊のように黒い布で右眼にマスクをかけている。それは、ぼくの右側の眼が、外観はともかく実はほとんど見えないからだ。といって、まったく見えないのではない。したがって、ふたつの眼でこの世界を見ようとすると、明るく輝いて、くっきりした世界に、もうひとつの、ほの暗く翳って、あいまいな世界が、ぴったりかさなってあらわれるのである。そのために、ぼくは完全舗装の道をあるいているうちに不安定と危険の感覚におびやかされて、ドブを出たドブ鼠のように立ちすくんでしまうことがあるし、快活な友人の顔に不幸と疲労のかげりを見出して、たちまちスムーズな日常茶飯の会話を、困難な渋滞感につきまとわれた吃りの毒で、台なしにしてしまうことがある。　（一二五頁）

引用文で分かるように、「ぼく」が片目を失ってからやがて目覚めるようになった世界は、単に狂気の世界ではなく、明るい世界の裏側にあるほの暗く翳った世界であったり、また、快活な顔に隠された不幸のかげりであったりする。つまり表面の世界ではなく、裏側の世界なのであり、はっきりと眼に見える世界ではなく普通の眼には稀にしか見えない、隠された世界である。十年前の回想記の中では、ただ「空」の世界、異常性の世界、あるいは「現実逃避の幻影の世界」[1]のように描かれていた「もう一つの世界」が、プロローグの中では、このようにより広い意味を持った世界として暗示されている。「ぼく」がこういうかたちで「もう一つの世界」の存在可能性を暗示しているのは、結局、人間という存在の持つ不可解なもう一つの側面を提示しているかのように見える。例えば、善意と対立する人間存在内部の悪意や暴力など、われわれの人生が必然的に含まざるを得ない暗闇の世界、かげりの側面が「もうひとつの世界」には込められているのである。そして、自分を「恐ろしい災厄からまもるつもりで」（一三九頁）赤ん坊を死なせたDの狂気じみた行動も、この「もうひとつの世界」に属しているかも知れず、また、自分の意志とは無関係に障害の赤ん坊が生まれたこと自体も、人生のかげり、不可解な側面かも知れない。ここで「空の怪物アグイー」と同じ状況が描かれている長編『個人的な体験』が想起される。主人公鳥（バード）は悩んだあげく結局、自分の赤ん坊を受け入れる決心をする。その決心をするまでに鳥（バード）が経験した苦痛、つまり赤ん坊を死なせたいという誘惑も、まさに「もう一つの世界」に属する人間存在の暗い断面であろう。その「ほの暗く翳って、あいまいな世界」が常に「明るく輝いて、くっきりした世界」に「ぴったりかさなってあらわれる」という二重性は、人間が生きていく以上、担わざるを得ない生の表裏なのである。要するに、この作品は、日常的な眼にとって不可視的ともいえる人間存在の不可解な「もう一つの」側面、裏側への一瞥として読むことができるのではないか。

そして、ここではまた、語り手の両義性の仕掛けとしての「片目」の役割にも注意を払う必要がある。この小説にプロローグとエピローグの形式が必要であったもう一つの理由は、「片目」の設定により〈語り手〉の両義的な態度を暗示するためだと考えられるからである。「ぼく」が失ったものが他ならぬ「片目」であるという点は、その世界に対する語り手の両義的な態度を表すのに非常に効果的な仕掛けになっている。「空」の世界を感じとる力を得るため片目を失ったということは、その世界が肉眼には見えない特別な世界であることを暗示すると同時に、その世界の持った非正常性・異常性を暗示することにもなるからである。つまり、「もうひとつの世界」をこの世界の一つの裏側として認めるか、そうでなければ簡単に異常な気違いじみた世界として拒絶するか、という問題をめぐる語り手の両義的な態度を裏付けるのに、

「片目」は極めて有効な装置となっているのである。〈語る「ぼく」〉は、〈語られる「ぼく」〉を「片目」にすることによってその世界の異常性をも暗示し、結果的に、語り手としての自分は、「もうひとつの世界」を肯定するようになった〈登場人物「ぼく」〉とは距離を置いた地点に立っていることを知らせているのである。

五、むすび

以上で考察したとおり、「ぼく」は最初はDの「もうひとつの世界」の外側に位置していたが、徐々にその内側へ近づいていく。「ぼく」がその世界を肯定するようになったということは、そのかげりの世界が人間の生きていく限り、誰であろうと完全には否定できない生の裏側であることを現しているように見える。しかし、作品全体を通して感じとられる〈語り〉は、その「ぼく」とは異なる位置からDの世界を眺め、その世界に対する両義的な態度を堅持する。

眼に見えない「もうひとつの世界」を想定していること自体が宗教的なモチーフであるが、その世界――誰にも完全には否定できない世界――の真偽が、実はそれが実在するか否かの問題ではなく、それを信じるか否かの問題に帰着するという点も、語り手はつづけて語っているように見える。「ぼく」が経験した話を信じるか否か、という問題は読者に委ねられ、〈語る「ぼく」〉は、決して〈語られる「ぼく」〉と同じ位置に立って〈語られる「ぼく」〉への共感を読者に強いているわけではない。それを可能にしてくれるこの作品の仕掛けは、〈語り手としての「ぼく」〉と〈登場人物としての「ぼく」〉の距離に起因するのである。

【注】

(1) 平野謙、「作家論Ⅲ―大江健三郎」『平野謙全集（第九巻）』、新潮社、一九七五、五二一頁

(2) 渡辺広士、「現代の恐怖―中期の短篇」『大江健三郎』〔増補新版〕、審美社、一九九四、八九頁

(3) 室井光広や井口時男は、この小説を子供をめぐる倫理的なこと、大江の私小説的な前提などを外して読んだときに、非常に密度の濃い作品として読めるといっている。桑原丈和も、「空の怪物アグィー」と『個人的な体験』は、小説として全く違ったものであると論じている。川本三郎、「特別インタビュー―大江健三郎」『文学界』、一九八五、二月号／井口時男外「座談会―大江全作品ガイド」『群像特別編集―大江健三郎』、講談社ＭＯＯＫ、一九九五／桑原丈和、「『個人的な体験』論」『大江健三郎論』、三一書房、一九九七、二〇四頁

(4) 本稿に引用したテクストは『大江健三郎全作品6』(新潮社、一九七二)による。以下テクストの引用は、ページだけを明記する。
(5) 渡辺広士、「解説」『空の怪物アグイー』、新潮文庫、一九九四、二八六頁
(6) 本論文の中で、〈語り手「ぼく」〉とが〈語る「ぼく」〉のように、特別な修飾がないまま「ぼく」と記されているのは、〈登場人物としての「ぼく」〉、つまり〈語られる「ぼく」〉を指す。
(7) 山折哲雄、「宗教経験としての涙」『日本宗教文化の構造と祖型』、青土社、一九九五、二四二―二四三頁
(8) 黒古一夫、「障害児との共生―父と子の共鳴音」『大江健三郎論』、彩流社、一九九四、一四六頁
(9) 平野謙、前掲書、五二四頁
(10) 黒古一夫、前掲書、一四七頁
(11) 渡辺広士、前掲書、二八六頁